

洪水と人々の暮らし ～語り部としての埋蔵文化財～



原口 強：東北大学国際災害科学研究所 特任教授
中央大学機構教授・大阪公立大学客員准教授・㈱STORY代表取締役

概要

洪水は人々の暮らしに災害を与える一方、肥沃な土壌を氾濫域にもたらす。最も著名なものが、エジプトのナイル川流域である。ナイル川の洪水は上流より肥沃な土壌を毎年ナイル河畔にもたらし、エジプトの豊かな農業生産を支えていた。この洪水の影響を調整するためにナイロメーターなどの技術が発達し、世界最古の文明であるエジプト文明が成立した。

現地では今でも砂漠に埋もれた遺物や遺構が発見され、その度に世界の注目を集めている。掘り起こされた遺物や遺構（埋蔵文化財）の地道な研究によって、人々の暮らしや技術、さらに知性や感情までも伺い知ることができる。まさに本物だけが持つ「語り部としての埋蔵文化財」のレゾナントル「存在意義」がここにある。

本講演では、海外の調査の事例（アンコール文明、古代アメリカ文明等々）などについても触れた上で、千曲川の地形の成立と洪水災害と人々の暮らし、その語り部としての埋蔵文化財の意義について考えてみたい。

内容

- 自己紹介
- 海外調査事例紹介（エジプト文明、アンコール文明、古代アメリカ文明、等々）
- 河川地形、特に千曲川沿いの地形と戊の満水
- 千曲川沿いの埋蔵文化財
- 上高地の成立を踏まえた河床上昇緩和戦略

洪水と氾濫

「洪水」は通常の境界を超えて大量の水が溢れ、水が無い場所が水で覆われること。河川管理上は水位が上昇し流速が速くなることを洪水と呼び、国土交通省の定義もこれに準ずる。

「氾濫」は洪水のうちの一つの現象。気象庁の定義では、増水により河川敷内部、さらには堤防の外にまで水があふれ出すことを指す。

流域治水

水災害の激甚化・頻発化等を踏まえ、堤防の整備、ダム建設・再生などの対策をより一層加速するとともに、集水域（雨水が河川に流入する地域）から氾濫域（河川等の氾濫により浸水が想定される地域）にわたる流域に関わるあらゆる関係者が協働して水災害対策を行う考え方。

石標が伝える洪水と人々の暮らし知恵



石標は、長野市小島・柳原遺跡群を横断する市道柳原 117 号線の脇に建てられていたもので、『長野市誌第 8 巻』にも由来が記載されている。この市道は、善光寺往来道とも呼ばれ、長らく堤防としても利用され、自然溢水させることにより水害の集中を避けてきた。大正年間に建てられたこの石標は、刻まれた水平線より高い工作物等を設置しないことが取り決められており、現在も道路はこの水平線を超えないように維持されてきた。

・・・考古学的手法によって、現代と近代を記録によって結びつけることができる事例である。（長野県教育委員会 丸敦史）

石碑に描かれた二本の線は、堤防の高さがこの間より高くてもいけないし、低くてもいけないことを意味する。（川崎保氏：長野県埋文センター）

➡堤防を敢えて低くすることで通常の洪水から地域を護り、異常時は越水を許容し氾濫を広域で受け入れることで壊滅的被害を軽減する治水。自然を正しく観察し、具体的な処方を行った物証。：原口の解釈